

仲村廃寺発掘調査報告

(旧練兵場遺跡内)

1984年3月

善通寺市教育委員会

訂 正

P 12 第9図- 43 上下逆

P 18 第13図のアミは砂利磨を示す

P 19 SX - 02 の写真 上下逆

P 25 第20図- 167 は錯合としたが、上下は別々のつぼの
口縁部のようである。彼ノ宗連跡でも同様のつぼの口縁
部のみが一組で出土しており、対をなす祭祀土器と推定
される。

補 足

善 ゼン shán : よいこと

通 ツウ tōng : かよう、つうずる

伝 テン zhuán : つたえる

燈 トウ dēng : 仏の教説

(伝燈: 法燈を受け伝える。)

古文書・古地図等には全て「伝(傳)燈寺」と記されている。

序

あおによし、奈良の都のいにしえのみやびの跡が静かに眠っている。

古い歴史を誇る人には、そこにそこはかとないはるかなるロマンを夢みる。

それが、伝導寺跡と呼ばれる遺跡である。

この地域の人、その心のふるさとともいえるこの遺跡について、これまで正式に調査が行われたことはなかったが、今回関係方面の御指導と御協力を得て、いくらかのベールをとることができた。

いま、資料の整理中ではあるが、調査報告書を作成し、多くの人々の活用に供するにあたり、関係の方々に心から感謝申上げ、今後ともに御支援と御協力を切にお願いする次第である。

昭和59年3月31日

普通寺市教育委員会

教育長 佐 柳 正

例　　言

1. 本書は、香川県普通寺市普通寺町に所在する、旧練兵場遺跡内の仲村廃寺に関する確認調査報告である。
2. 本調査は、普通寺市教育委員会が主体となり、香川県教育委員会文化行政課の指導のもとに、第一次調査を昭和58年8月1日より同月24日まで、第二次調査を昭和58年11月21日より翌年2月10日まで行った。
3. 本書の執筆は安田和文・笹川龍一が行い、笹川が編集した。
4. 写真撮影は安田・笹川が分担し、出土遺物の実測・整図は笹川が行った。
5. 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
(溝：SD　土坑：SK　柱穴：SP　石組みの溝・住居跡：SX)
6. この調査を通じて、普通寺市在住の矢原高幸氏・安藤文良氏から、また奈良大学の水野正好先生からも貴重な資料の提供と御助言をいただきました。ここに謝意を表します。

目　　次

1. はじめ	2
2. 位置と環境	3
3. 調査の概要	6
4. 第一次調査	
①土層と遺物の出土状況	7
②遺構	8
SX-01実測図	9
③出土遺物	10
5. 小結	13
6. 第二次調査	
①土層と遺物の出土状況	14
②第一遺構面	16
③第二遺構面	17
④第三遺構面	18
SX-02実測図	19
⑤出土遺物	20
7. まとめ	33

1. はじめに

伝導寺（伝燈寺）跡とも称せられる仲村廃寺は、白鳳期から奈良時代前期にかけて創建された寺院といわれてきたが、正確な所在地・伽藍配置・寺の歴史等を記載した文献はなく、遺跡付近の側溝工事やビル建設などの工事に伴って出土した瓦や、伝導寺墓地内に墓石に転用された寺の礎石が残存していることから、現在の普通寺町本村道下付近に当寺院が存在していたのではないかと推定されている。⁽¹⁾

しかしながら、正式な調査が実施されないまま寺院跡の周辺では急速な都市化が進み、ビルや家屋が林立し、このまま放置すれば寺院についての詳細が確認できなくなってしまう恐れがでてきた。また、当地区は現在の普通寺市街地を含め、弥生時代中期より古墳時代にかけての遺物が広範囲にわたり豊富に出土することで知られる、旧練兵場遺跡にもかかっている。この遺跡についても正式な調査は実施されたことがなく、これに関する調査報告も待望されている。⁽²⁾

そのため普通寺市教育委員会は、仲村廃寺及び旧練兵場遺跡の遺構の有無を確認するため、仲村廃寺の寺域内と推定される市営駐車場の発掘調査を実施した。第一次調査では寺院の遺構の確認を第一義的目的としたため、寺院に伴うと考えられる遺構面で止め、下層に存在していた弥生土器等の包含層については、発掘区内において偶然認められた現代の建築資材の廃棄穴内の断面観察のみにとどめた。第二次調査では第一次調査区をさらに拡張し、前回と同じ遺構面をとらえた後さらに発掘を進め、仲村廃寺の遺構に続き、弥生時代後期の住居跡を含む遺構群を確認した。

なお、本遺跡は「仲村廃寺」の他に「伝導寺跡」との呼称があるが、「香川県史」「香川叢書」では「仲村廃寺」とされており、本報告書ではこれに統一することにする。

注、(1)(3)「普通寺市史」(2)安藤文良氏の御協示による。



仲村廃寺から出土した瓦



仲村廃寺礎石

2. 位置と環境

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置しており、また真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市である。西は三豊郡高瀬町・南は仲多度郡琴平町・東は丸龜市・北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市の地形は、金倉川・弘田川などの河川によって形成された沖積平野と、その背後にある山々から成り立っている。仲村廃寺は、四国靈場75番札所として栄えた旧市街地の北西部に位置し、周辺は都市化が進んでいる。また市街地の西を流れる弘田川よ



第1図 仲村廃寺の位置と環境 (S = 1/50,000)

り約700mほど東に進み、標高約28~29mを計るが、この高さは周辺の平野部の中では比較的高所である。

さて、この付近の遺跡について概観していきたい。善通寺には肥沃な平野を背景として、弥生時代前期には、すでに人々が定住を開始していたようである。前期の代表的な遺跡として、三井遺跡・五条遺跡が挙げられよう。三井遺跡は、善通寺市北部から多度津町三井にかけて存在しており、現在も遺跡の範囲は確認されてはいないが、壺・甕等が出土している。五条遺跡は、善通寺市の東部を流れる金倉川の東約500mに位置する。壺・甕の他、石包丁などの石器類が出土しており、この地方で稲作が行われていたことを示している。この他、弥生時代全時期にわたる遺物の出土する遺跡として旧練兵場遺跡があり、ここからも前期の甕が出土している。旧練兵場遺跡は、善通寺市市街地の北部一帯に広がり、西は筆ノ山・東は四国農業試験場に及び、この遺跡の立地には金倉川・弘田川と、それに伴う小河川が重要な役割を果たしていたと考えられる。中期の遺物としては浅鉢型の土器が注目されるが、出土量としては、壺・甕・器台・高杯等の後期の土器の占める割合がもっとも多く、さらには小児を葬ったと推測される甕棺が多数出土しており、この地が重要な

影響を、当時の社会に及ぼしていたと考えられる。今回調査した仲村廃寺も、この旧練兵場遺跡内の南西隅に位置している。また、この遺跡の西端には、同じく弘田川を背景とした普通寺西遺跡がある。これは弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての遺跡であり、水路が検出され、ここから櫛等が多数出土した。遺跡が弘田川の西岸にあることから、川の両側に弥生遺跡が存在していたことが確認できた。この他、石川遺跡でも後期の土器が出土しており、平野部における弥生時代の遺跡は、前期より一貫して確認されている。

一方、市街地の周辺の山々では青銅器が多数出土している。まず、市の南部にある大麻山の北麓にある瓦谷からは銅劍7個・銅鉢1個、東部にある陣山から銅劍3個、西部の我拝師山では銅劍5個・銅鐸1個が発見されている。この他、丘陵地帯には多数の土器・石器・石棺等があったと言われているが、開墾・開発のため多数が消滅してしまったようである。

次の古墳時代に入ると、普通寺市内には400基を超える古墳があったとされており、現市街地である平地にも古墳は築造されたようである。現在は消滅しているが、仲村廃寺付近にもホトギ塚・伝導寺古墳・遊塚など10基程の円墳があったとされており、農業試験場内から須恵器が多数出土していることから、古墳時代に至ってもやはり、金倉川・弘田川に狭まれたこの地域が、当時の人々にとって意味深い土地であったことがうかがえる。

奈良時代に入ると、普通寺市は那珂郡・多度郡に属し、仲村廃寺は多度郡仲村（奈加無



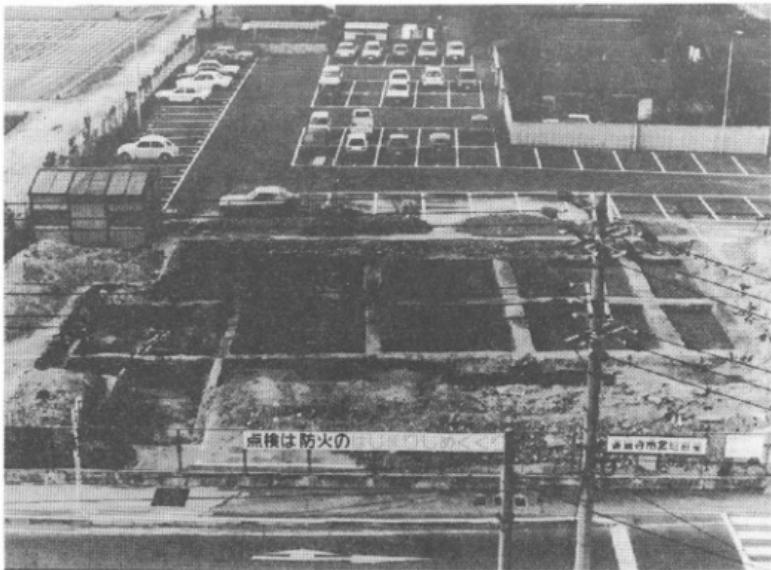
第2図 調査区の位置とグリッド設定図 調査区全景

良)郷にあったと思われる。多度郡の郡衙の所在は不明であるが、現在の中村城址がそれに相当するのではないかという説がある。

奈良時代の遺跡としては善通寺の前寺がある。現在の善通寺は東西二院の伽藍に分かれているが、東院の土壘に囲まれた方二町の一画が創建時の境域とされる。創建年代は、出土した軒丸瓦・軒平瓦などから奈良時代前期に比定できる。このため弘法大師建立説よりも、出身である佐伯氏の氏寺を現在の善通寺に改めたという説が有力になっている。現在の金堂では、前寺の礎石を基壇に再利用しており、塔心礎と考えられる花崗岩もある。また、金堂裏の講堂跡が昭和47年に発掘され、自然石を並べた遺構を検出しているが、詳細は不明である。この善通寺前寺は、仲村廃寺と出土した瓦が類似していることから、両寺の関連が注目されている。

善通寺市は弥生時代より綿々と栄えてきた土地であり、歴史時代に入っても佐伯氏などの有力な豪族が活躍した。そのため、史跡・遺跡の数は膨大な数になる。仲村廃寺も寺院跡という性格のみに留まらず、下層に堆積している弥生時代の遺構群、さらには周辺の前方後円墳群を築き上げた氏族との関連性などについても目を向けてゆく必要がある。

参考文献 「善通寺市史」「香川叢書」「仲多度郡史」



調査区全景（南より）

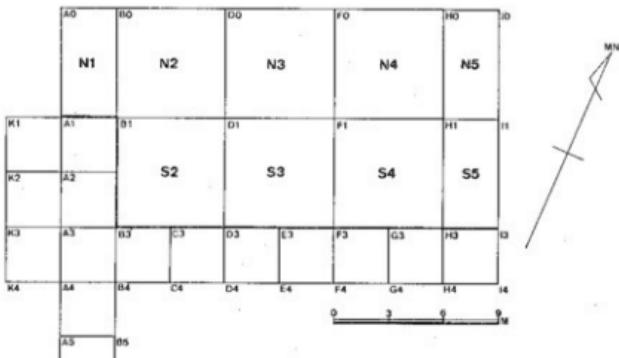
3. 調査の概要

調査対象地区は現在市営駐車場となっており、アスファルトを敷いている。隣接する農業試験場との比高差は約50cmで、市営駐車場が高くなっている。調査対象面積は約1,200m²である。発掘区の設定にあたって、第一次調査では、調査対象区の西に幅3m・長さ13.5mのトレンチを設定し、そのトレンチに直交するように幅3m・長さ21mのトレンチを作り、遺構が確認された場合は調査区を拡張することになった。トレンチの南北軸は現磁北に対して24°西に振っている。各グリッドは3×3mを一区画とし、グリッドの名称は北西隅の杭番号で代表させることにした。

調査は仲村庵寺に伴う遺構の検出を主目的としたので、弥生時代の土器包含層の発掘は行わなかった。また調査にあたっては、手掘りではアスファルトの除去のみで日数が浪費されてしまうので、掘削重機を使用してアスファルト及び客土を除去した後、発掘を開始した。しかしながら、調査開始と同時に気象台開設以来という猛暑に襲われ、汗と乾きとの闘いの調査であったが、予想以上の成果を収めることができた。

第二次調査では、第一次調査の発掘区をそのまま北へ延長する形をとり、各グリッドは6×6(6×3)mを一区画とし、各グリッドの名称は多量に出土した遺物の整理の都合上、北側の一列を西からN1・N2・N3・N4・N5とし、南側の一列を西からS2・S3・S4・S5とした。ここで、第一次調査において確認された遺構面をとらえた後、さらに第二遺構面・第三遺構面を続けて検出し、また出土遺物についても非常に貴重な資料が多く、とても素晴らしい成果をあげることができた。

余談ではあるが、第二次調査においても気象台開設以来という寒波と豪雪の連続であり、それにもかかわらず追跡発掘作業に参加していただいた方々に感謝したい。



第3図 グリッド配置図

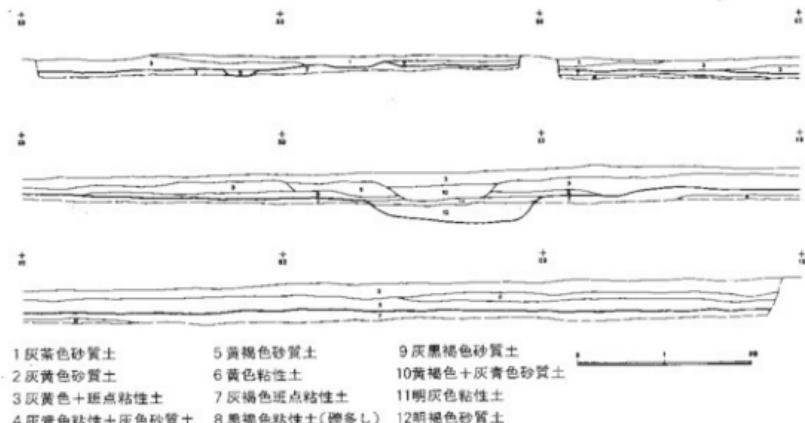
4. 第一次調査

①土層と遺物の出土状況

調査区の地表面にはアスファルトが5cmほどの厚さで敷かれ、さらにその下には60cmの厚さで角礫の客土層があり、発掘はそれを除去し、地表より70cmほど下がった地点より開始した。発掘調査は弥生土器片を多量に包含する土層を一部検出した段階で停止しているので、土層序はその包含層までの記述とする。なお防空壕を建設した際に使用されたと思われるコンクリートなどの廃棄坑が、D3～F3区において幅2m・長さ6m・深さ2mの規模で検出され、その上坑内の廃棄物を除去したのち、ここでも土層が観察できたので、それも併せて記すこととする。

土層は大別して3層に分かれる。まず第1層は現代の遺物を含む擾乱層であり、灰青色の砂層・灰茶褐色粘質土に分けられる。この層からは、小さく砕け、摩滅して丸くなかった古瓦等が多数出土した。これは近現代に堆積したものであり、恐らく終戦時に練兵場が廃棄されて後の堆積層であると思われる。第2層は灰褐色に茶色の斑点の入る粘性土層で、弥生土器片や須恵器片等を含んでおり、発掘区内ではほぼ水平に堆積している。この層は、古墳時代以降に堆積したと思われる。第3層は黒褐色の粘性土層で厚さ60cm、親指大の礫を多く含んでいる。土層中の遺物から、弥生時代後期以降に堆積したと思われる。第3層の下には50cm以上の厚さで砂利層があり、河川の氾濫の結果であると考えられる。

第3層とその下の砂利層については、廃棄坑内の壁面の観察によるものであり、発掘区全体の土層序については第2層までしか確認してはいない。



第4図 調査区土層図 (K 3～H 3北壁)

②遺構

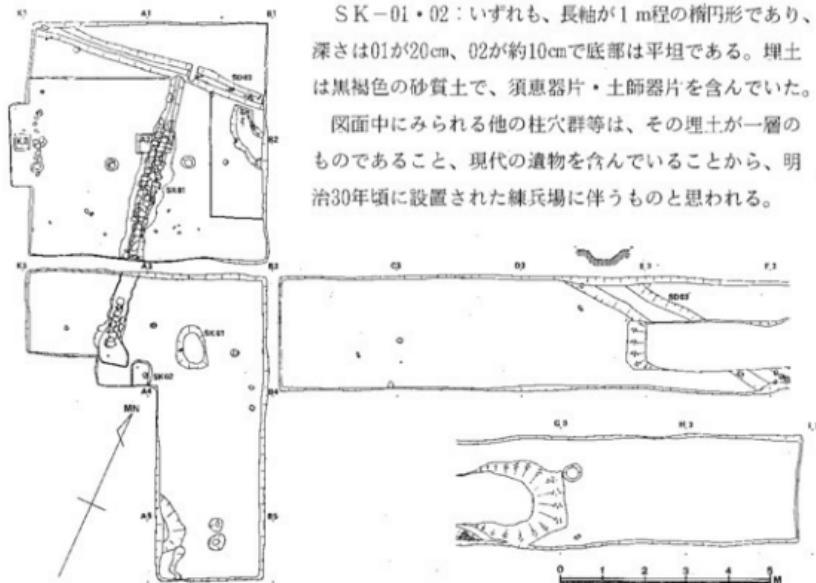
調査区である市営駐車場は、練兵場を経て普通寺土木事務所のあった所で、土層はかなりの深さまで攪乱を受けてはいたが、第1層を除去した、地表から約1mの深さで、石組みの溝・素掘りの溝・上坑等を検出することができた。

S X - 01 : この遺構は N8°W 方向へ走る全長7m程の、河原石による石組みの溝で、水路として利用されていたものらしく、練兵場設置の際に地表が水平に整地され、溝の延長部は削り去られたようである。以前は石組みが、さらに南に延びていたものと思われる。この溝はその構造から4つに区分できる。残存する南端より4mの所まではやや水平で、溝の底部に偏平な石を丁寧に敷き詰めてあり、その両側は残存部の様子から、石が三段積まれていたらしい。ここから同様の構造の石組みが約5°の下り勾配となり1.5m続き、ここでこれまで三段積みだったものを、大きな石を両側に門柱のように直立させて石組みを終わらせている。S D - 03 に合流するまでは平坦な素掘りの溝となる。①から④への落差は約20cmである。溝の埋土は、やや砂を含む粘質の黒褐色土であり遺物は殆ど含んでおらず、土師質の土器片がわずかに出土しただけであり、溝に伴うか否かは不明である。

S D - 03 : ほぼ東西に走る素掘りの溝で、S X - 01 と合流することや埋土を同じくすること、含まれる遺物の様子などから、これと同一時期の溝であるといえる。

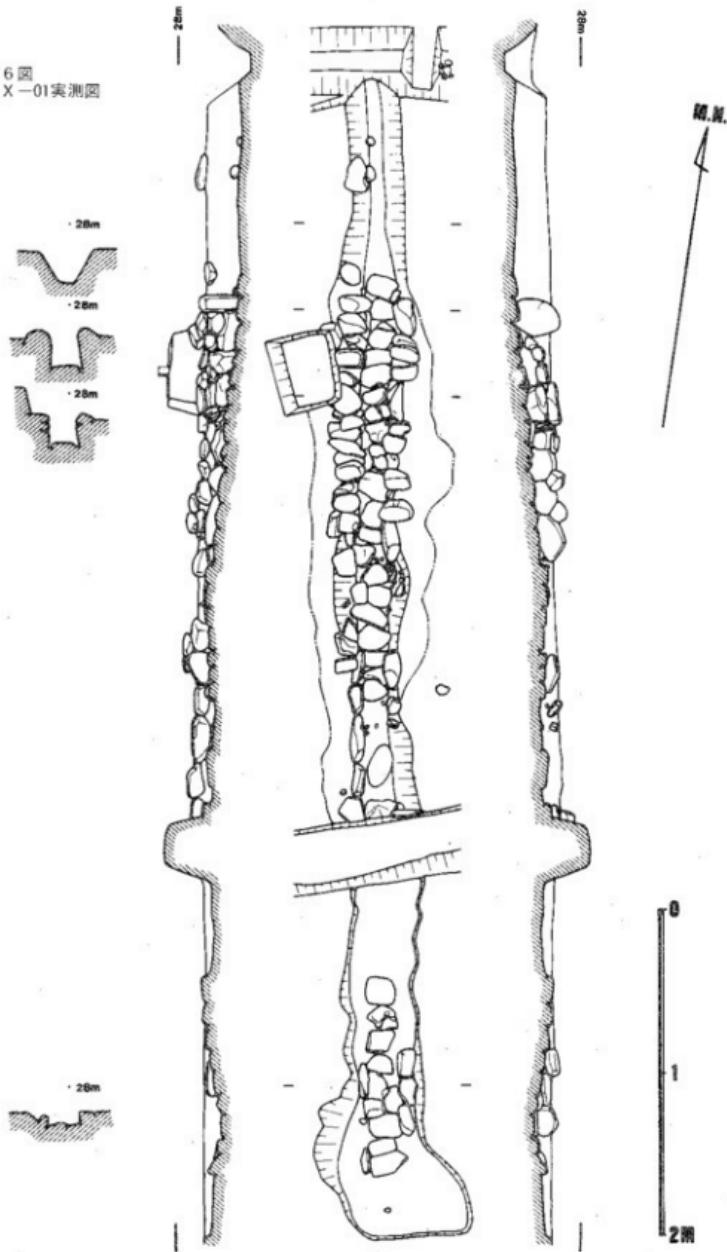
S K - 01・02 : いずれも、長軸が1m程の梢円形であり、深さは01が20cm、02が約10cmで底部は平坦である。埋土は黒褐色の砂質土で、須恵器片・土師器片を含んでいた。

図面中にみられる他の柱穴群等は、その埋土が一層のものであること、現代の遺物を含んでいることから、明治30年頃に設置された練兵場に伴うものと思われる。

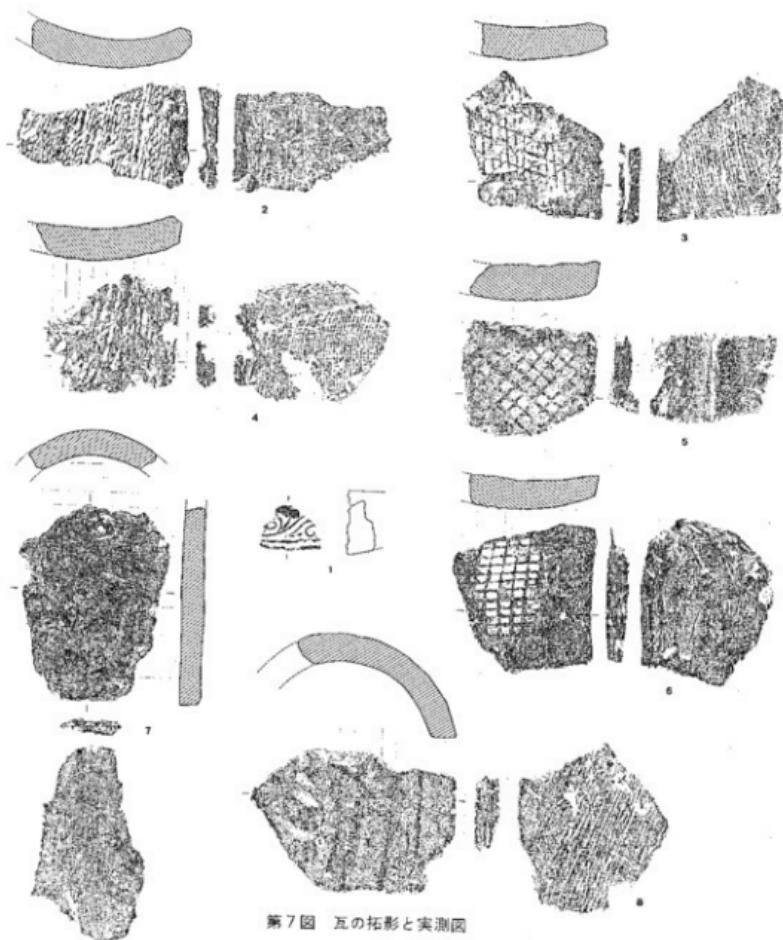


第5図 発掘区実測図

第6図
S X -01実測図

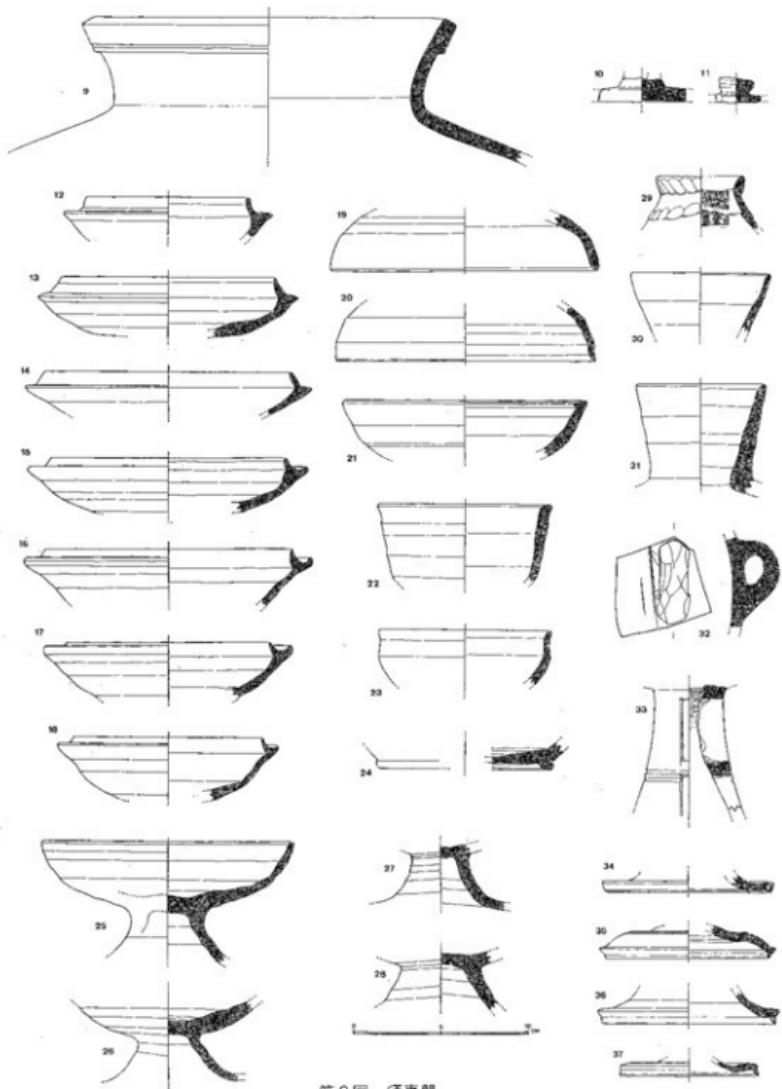


③出土遺物



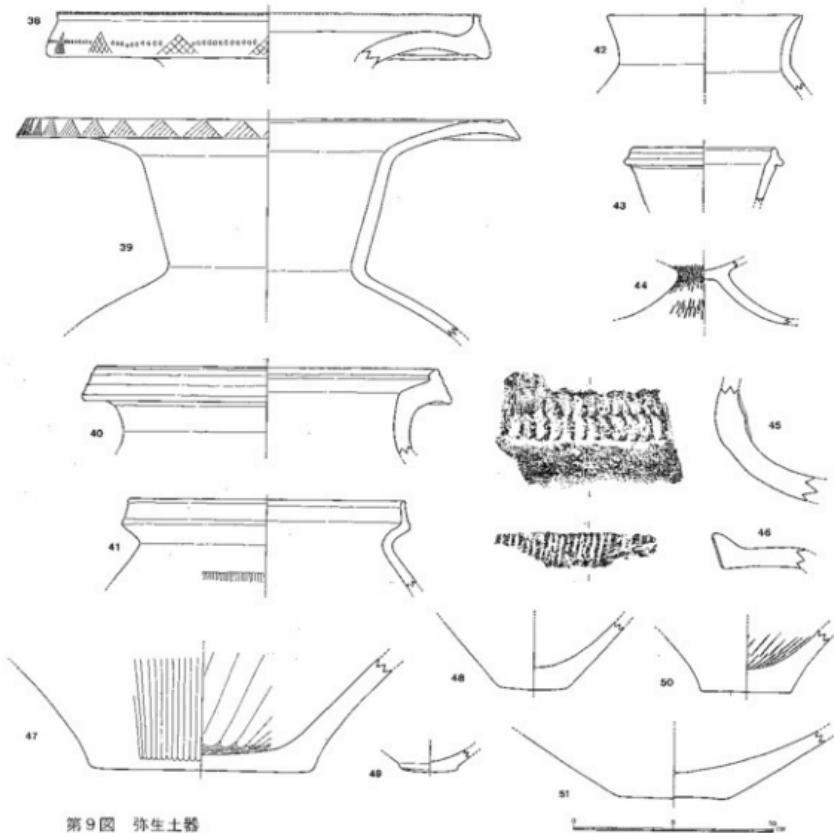
第7図 瓦の拓影と実測図

今回の調査において出土した瓦類は、そのほとんどが磨滅した小片ばかりで数も少なかったが、法隆寺式の忍冬唐草文を原型とした軒平瓦片が出土している。これは内区に扁唐草文・上縁と左右両縁に密連珠文を配したもので、八葉單弁蓮華文の軒丸瓦に対応すると考えられており、県内では開法寺の出土例が知られている。また、河内（現大阪府柏原市）における田辺廃寺・五十村廃寺等からの出土例は著名であり、この瓦の源流とされており、両者のつながりやその伝播経路が問題提起されている。



第8図 須恵器

瓦類の他にも須恵器片が多数出土している。壺・甕・坏・高坏等、多種多様の器形が判別でき、その時期についてもかなりの幅がみられる。これらの遺物も瓦と同様に、遺構からの出土ではなく、全て攪乱により埋土中に二次的に堆積していたものばかりである。



第9図 弥生土器

当調査区は旧練兵場遺跡にかかり、第1層及び第2層から多量の弥生土器片が出土した。やはり擾乱による二次的・三次的な堆積層からの出土のため、細片ばかりで土師器との判別が極めて難しく、第9図には明確なものだけを取り挙げた。これらの遺物と共にサヌカイト片が多数出土し、そのうち石器と確認されたものも数点あった。

第一次調査では、当調査区が古代寺院跡としては瓦の出土数が少なく、土層の殆どが擾乱を受けていたことから、各土層が形成された時代やS X-01・SD-03等の遺構の詳細を究明し、仲村庵寺に結びつけるまでには、残念ながら至らなかった。

参考文献 「古瓦百撰」一讃岐の古瓦一 安藤文良

「讃岐国古代寺院跡の研究」 藤井直正

5. 小 結

今回の調査によって判明した事実と問題点を列挙していきたい。

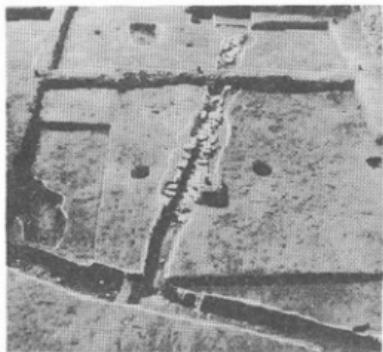
①SX-01…検出したSX-01は第2層を掘り込んでおり、古墳時代以降に作られたものと思われる。第1層は、土層の頁で述べた通り近現代に形成されていることから、SX-01は恐らく明治30年頃に、当地区が練兵場として整地された際、現存している部分を残して削り去られたものと思われる。これは第2層上面が極めて水平であることからも想定できる。

また、古文書・絵地図から仲村廃寺付近の中世の状態をみると、徳治二年（1307年）の「一円保差図」では、この一帯は普通寺寺領及び名田となっており、人家の存在はなく既に耕地となっている。さらに朔って久安二年（1146年）の「讃岐国善通・曼茶羅寺寺領注進状」によれば、この一帯は三条七里の35坪及び七里の2坪付近に相当し、やはり寺領となっている。SX-01はその構造から考えて、何らかの建物に伴う排水溝の可能性が強い。従って中世以前の遺構である可能性が高い。

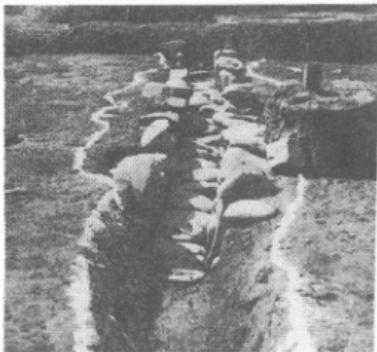
②伽藍及び寺域について…今回の調査では、仲村廃寺の伽藍や寺域を示す遺構は確認できなかった。また瓦の出土量も少なく、寺院の中心は市営駐車場付近ではないようである。1979年に伝導寺墓寺の北隣でビルが建設された際、現地表下約30cmあたりで瓦が層をなして堆積していたということや、伝導寺墓地に礎石が現存していること、墓地周辺では今も瓦が多数採取できることなどから、伽藍はやはり墓地付近に存在したと考えられよう。今後この地区的調査が仲村廃寺を知るうえで最重要となるであろう。

③弥生土器包含層について…同一層に中期から後期末にかけての土器片が含まれており、その包含状態も不自然であり、古墳時代前後の土層攪乱が想定できる。

第二次調査では、この土層の解明も必要となるであろう。



SX-01・SD-03 (北より)



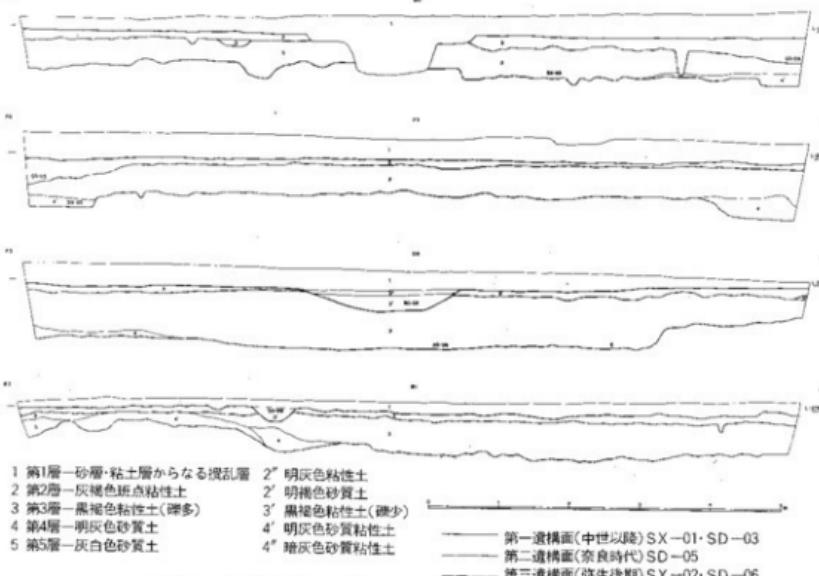
SX-01 (北より)

6. 第二次調査

①土層と遺物の出土状況

第一次調査と同様に、地表面より60~70cmの厚さの角礫の客土層とアスファルトを除去し、第一遺構面の延長を検出することから作業を開始した。そして現代の擾乱層である第一層を取り除くと、やはり灰褐色の班点粘性土が、発掘区内全体にわたりほぼ水平な堆積層としてあらわれた。第一層中には、弥生土器・須恵器・瓦等の細片から、現代に至る遺物が一括して含まれていた。これは明治30年頃の練兵場築地の際に削られ、整地された地面が第一遺構面として検出されたものであり、終戦により放置された当地を農地とするため客土したもののが第一層であるとみて間違いなく、前回の調査で確認されたSX-01・SD-03をもつ遺構面は、本来もう少し高所に位置していたものと思われる。また、S2・S3グリッドにおいてSD-03の延長が検出された。ここでS2グリッドにおいて2層直上から銅鏡が出土したが、古墳時代の遺物らしく擾乱による出土であると思われる。

第一遺構面を検出した際、第2層中より瓦が露出しているのが数か所に認められた。これらの瓦片は第一層から出土したものと比較して大きく、ほとんど磨滅していないものばかりであった。そこで第一遺構面の調査完了後、第二層の除去作業を開始した。



第10図 土層と遺構面の関係

第二層の堆積は約10cmで、厚いところでも12.3cm程であり、比較的短時間で第二遺構面を検出することができた。第二層では、第三層直上から多量の瓦片が出土し、発掘区北東隅（グリッドN 3～N 5）においては、磁針方位の東西に走り、北に向って50～60cm落ち込む段が検出された。この落ち込みに沿った段の下部からは、八葉複弁蓮華文軒丸瓦・扁行忍冬草文軒平瓦を含む多量の瓦片が集中して出土した。他のグリッドは第一遺構面と同様に水平な面を保ち、土壌や築地など他の遺構は何も検出できなかった。

第二層中からは瓦等の他に、わずかながら綠釉・輸入陶磁（青磁）・土鍋等の細片が出土しており、第一遺構面が中世以降のものである可能性が高くなってきた。またN 4グリッドからは、第二層直上より大觀通宝（宋、1107年～）が出土している。

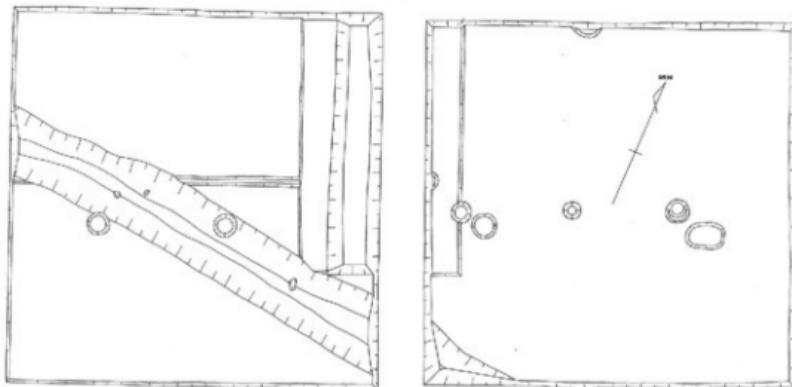
伝導寺墓地内の礎石が集中する場所を中心として、方一町半の寺域を想定すると、その北限はちょうどこの落ち込みの所である。ここまで調査において、第二遺構面が仲村庵寺のものであることは確定的であり、この落ち込みも寺院を囲む濠の可能性もあるので、遺構名をSD-05とした。そして第二遺構面の調査完了後、代表して全発掘区中央部のS 3グリッドを代表して掘り下げ、旧練兵場跡にトレーンチ探査を試みた。

S 3グリッドのトレーンチ探査において第三層を除去する際、遺物の包含状況や土層の堆積状況などから、この層が整地層であることが確認できた。また、この整地層に含まれている遺物は、分銅形土製品をはじめとした弥生時代中期から後期末にかけての遺物から、須恵器・土師器等であるが、これらを整理した結果、須恵器や土師器の壺の器形より判断して、一番新しいもので六世紀末から七世紀中葉にかけてのものであることがわかった。つまり第三層は、それ以降である近い時代に50cm以上の厚さの客土がなされ、整地の行われた結果であり、白鳳期の瓦が出土するこの寺の成立年代と合致するものと考えられる。

また、このS 3グリッドの北西隅、第三層下の灰白色砂質土（第五層）中の土坑から、後期末頃のものと思われる弥生土器が四点出土した。第5層は南端で砂利層に変わり深く落ち込む。河川の氾濫原であるらしく、これをSD-06とした。また残りのグリッドについても第三層を除去し、S 2グリッドでSD-06の延長、S 4・N 4グリッドで上坑群、N 3グリッドにおいては竪穴住居を検出した。SD-06では砂利層の直上から舟形土製品・石製模造品（双孔円盤）が、また他にもミニチュア土器が二点出土している。

竪穴住居跡はN 3グリッドの北東隅にその一部をのぞかせているだけであり、発掘区内の全調査の完了後、発掘区を北に拡張し、住居跡全体を検出した。これをSX-02とする。またSD-05の延長が、SX-02の上を第三遺構面（第五層）に切り込んでいることが確認された。仲村庵寺の基礎工事で整地層が築かれた後、濠として削り込んだものか、土壌を整形する際に削り取った痕跡と考えられる。

②第一遺構面



第11図 SD-03実測図

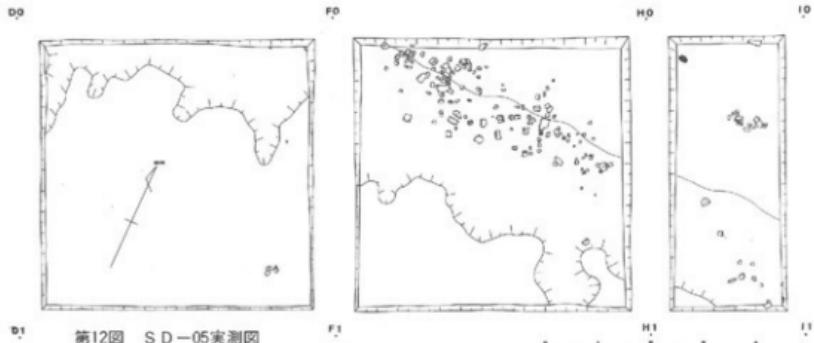
前頁でも述べたように、第一遺構面は下層から上鍋や青磁の細片が出土したことから、中世以降に作られた溝であると考えられるが、古地図から判断する限りでは、当時ここが寺領であり耕地であったことしか判明しない。しかし SX-01のような立派な石組みをもつ排水溝は、何らかの建物に伴うべきである。施設の存在が想定できる SX-01の上方は、練兵場設置の際に30cm以上削り去られており、その詳細を究明することは困難と思われる。

遺構面上にみられる SX-01や SD-03以外の柱穴群や溝は、現代のものである。



発掘区全景（第一遺構面・SX-01、SD-03）

③第二遺構面

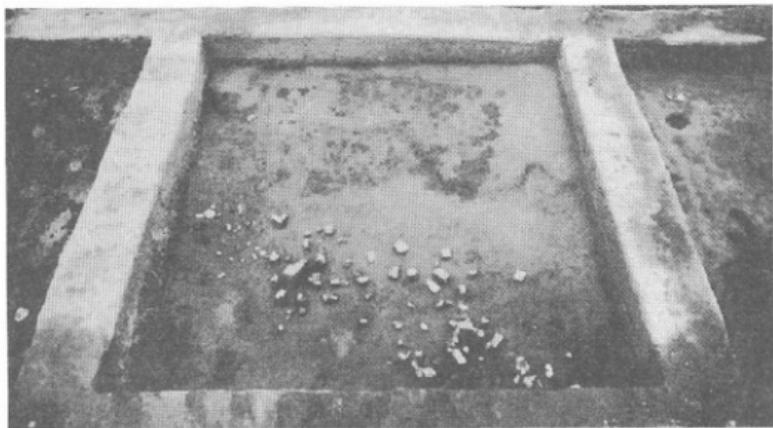


第12図 SD-05実測図

発掘区内で認められた第二遺構面上の遺構はSD-05だけであり、土塁・築地にあたるものは、その痕跡すら認められなかった。この遺構面を構成する第三層は整地層である。

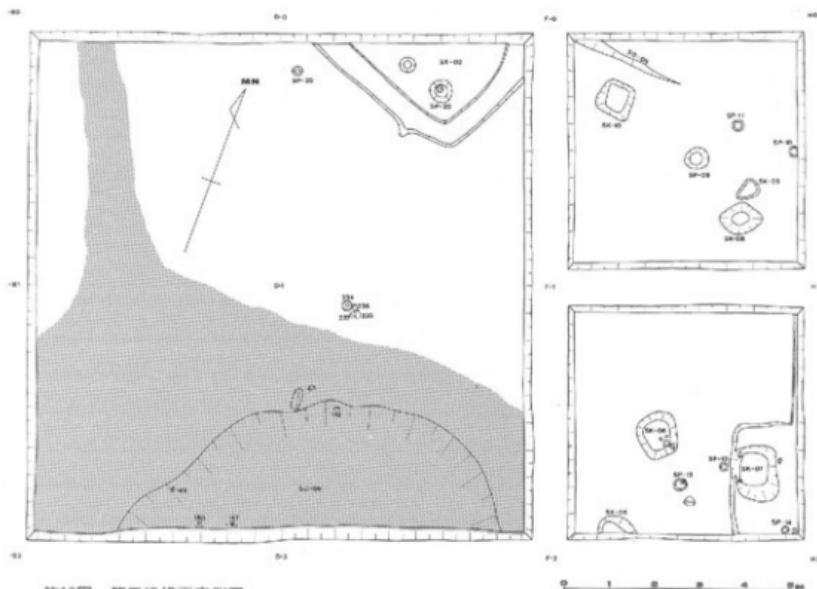
SD-05はその遺物の出土状況などから判断して、これが仲村廃寺に伴う遺構であることは間違いないと思われるが、寺地の周間にめぐらされていた濠であるのか、寺域を示す土壤であるのかは、残念ながら判明はしていない。しかしながら、仲村廃寺の中心であったと推定される伝導寺墓地を中心とした、方一町半の北限に位置するということと、条里方位とは関係なく磁針方位のほぼ東西を示していることは、非常に興味深い事実である。

伝導寺墓地周辺部及び、墓地を中心とした一町半四方の地域推定地における、今後の調査が期待される。



SD-05とそれに伴う瓦の集積（N 4 グリッド・北より）

④第三遺構面

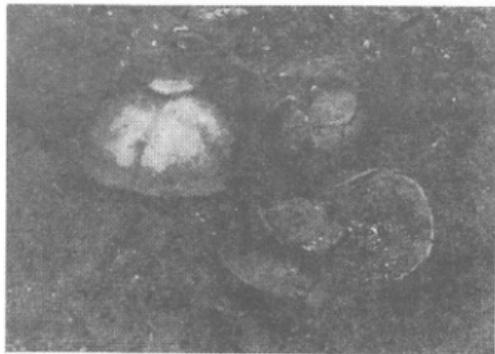


第13図 第三遮構面実測図

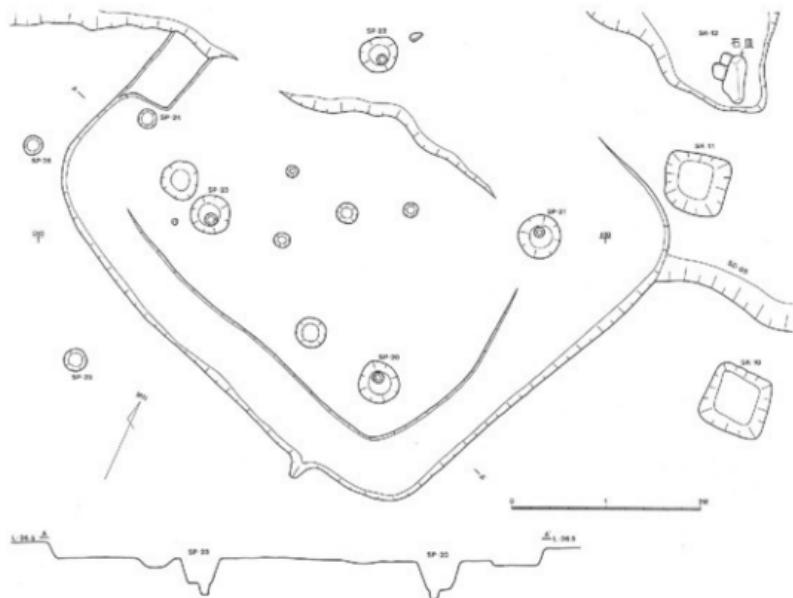
第三層（整地層）を取り除くと、灰白色の砂質土層からなる第三遺構面があらわれる。この遺構面上では、数多くの土坑や柱穴の他に竪穴住居が検出され、これらは全て暗灰色の砂質粘性土が埋土となっていた。土坑はその殆どが同一規模の方形であり、同じ目的で作られたものと思われるが、遺物は何も検出されず、その性格は不明である。

第三遺構面上には、一部に明灰色の砂質粘性土層があり、ここより弥生土器が四点集中して出土している。（右写真）

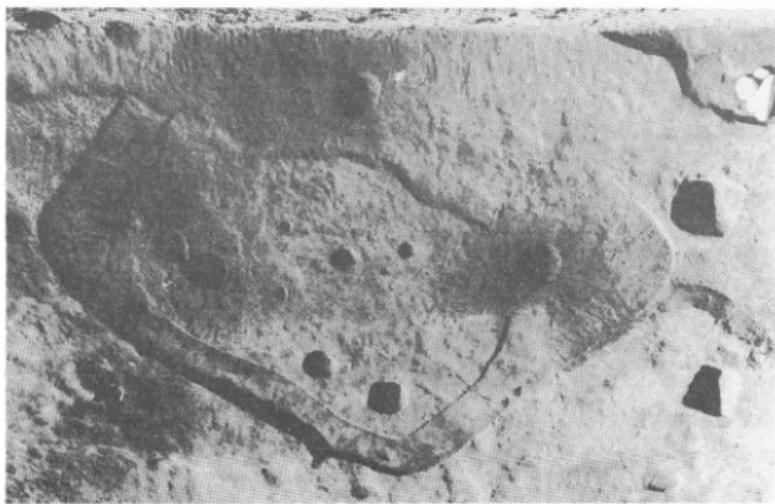
S2・S3グリッドの南端では、砂質の遺構面がこぶし大の河原石を多量に含む砂利層となり、振り鉢状に南に向って落ち込む。金倉川の支流の痕跡を示す氾濫原であると思われる。古地図ではこの周辺に湧水地が數多く描かれており、氾濫原を残した河川の規模がうかがえる。



弥生土器の出土状況 (S 3 グリッド)

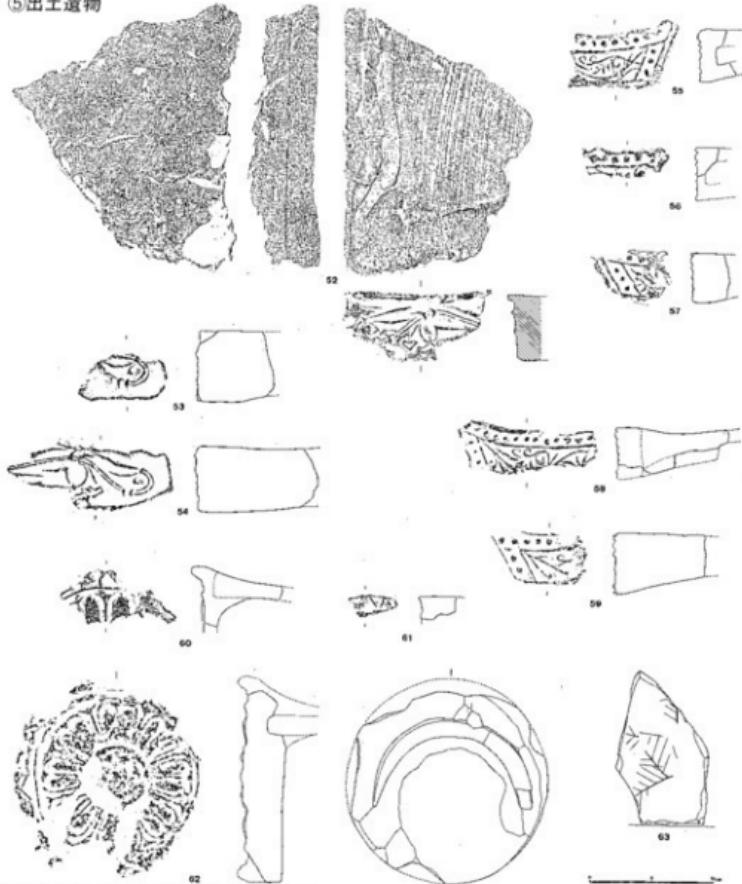


第14図 SX-02実測図



SX-02 (北より)

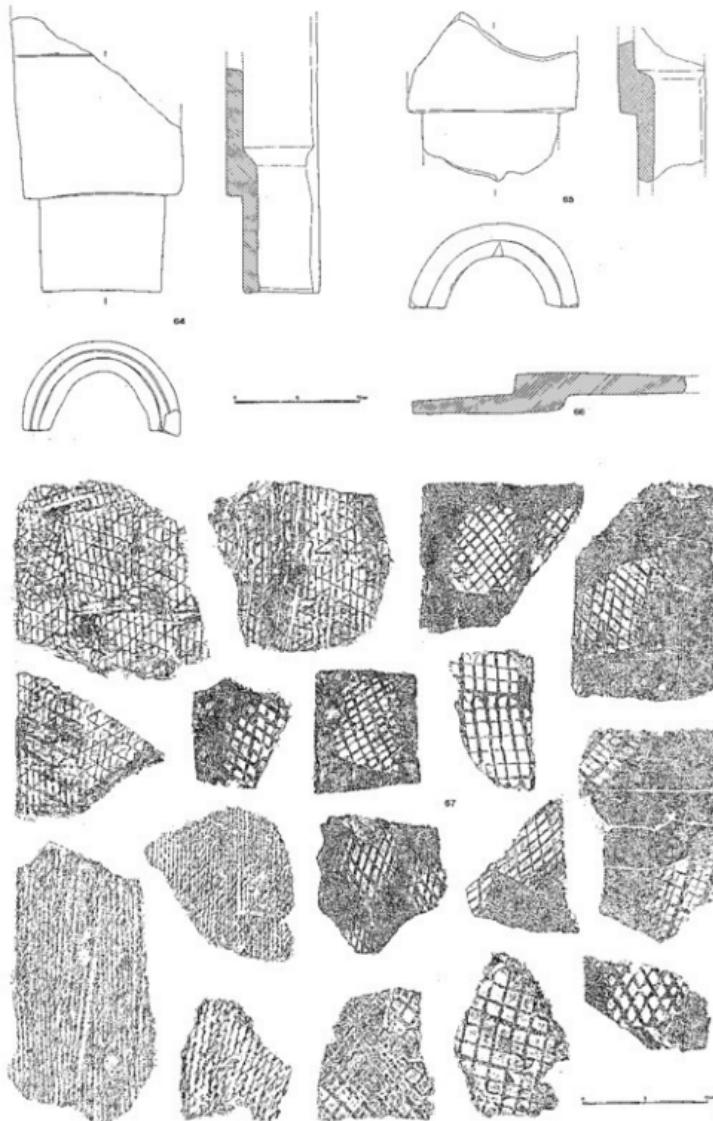
⑤出土遺物



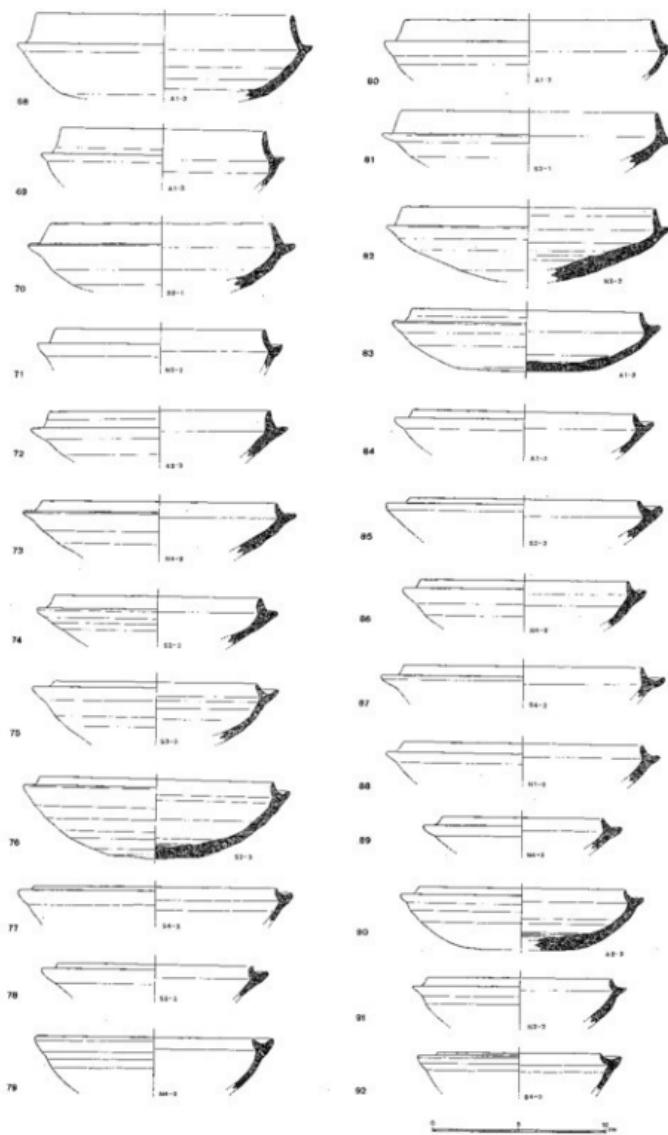
第15図 軒丸瓦と軒平瓦(拓影と実測図)

第15・16図で示した瓦は、全てSD-05の遺物集積地からの出土である。

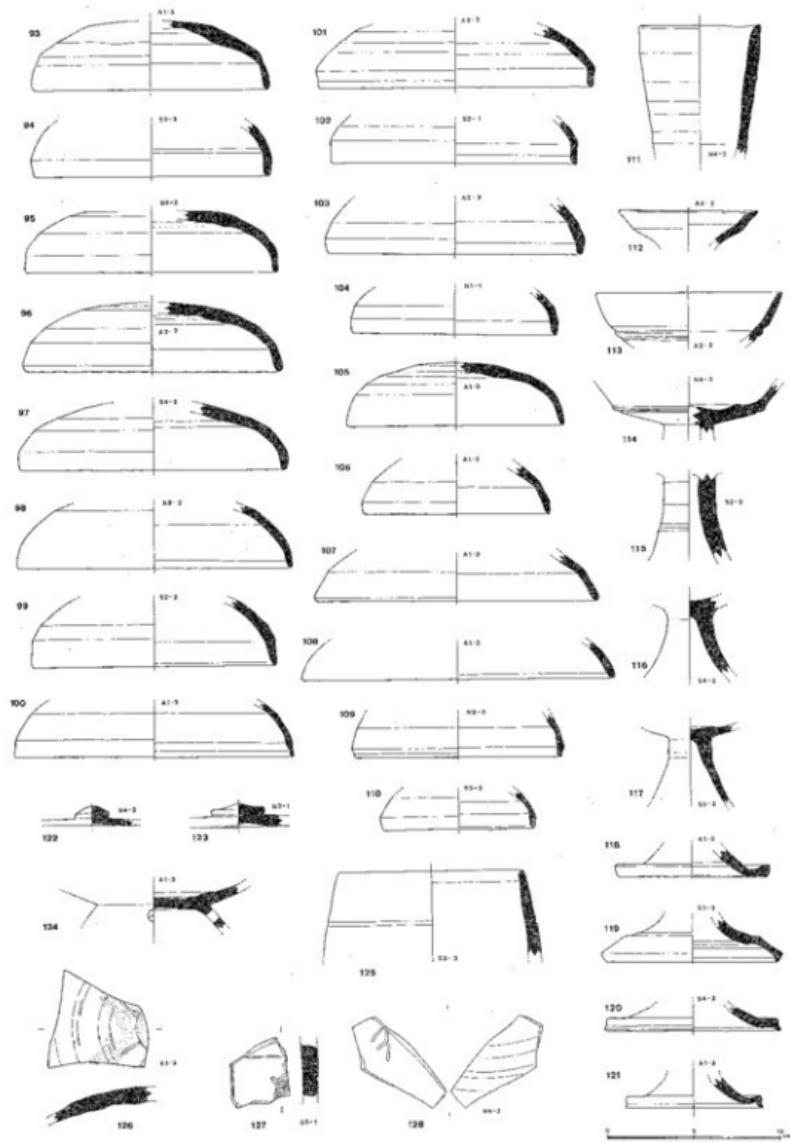
52~54は法隆寺式と称される、奈良時代前期の均正忍冬唐草文軒平瓦である。この唐草文は本幹が二条の複線で、三箇所に結節を設け、これに葉形か蕾形を付けたもので、県内では善通寺の他、三豊郡の道音寺跡でこの様式の瓦が出土している。55~59は前回の出土と同じく、珠文帶忍冬唐草文の軒平瓦である。60・62は八葉複弁蓮華文軒丸瓦で、周縁は三角縁で内斜面に十六個の線鋸齒文をめぐらし、内区の中房に九個の蓮子を配している。63は凹面に布目、凸面には繩目叩きや格子目叩きではなく木の葉の跡を残す平瓦である。



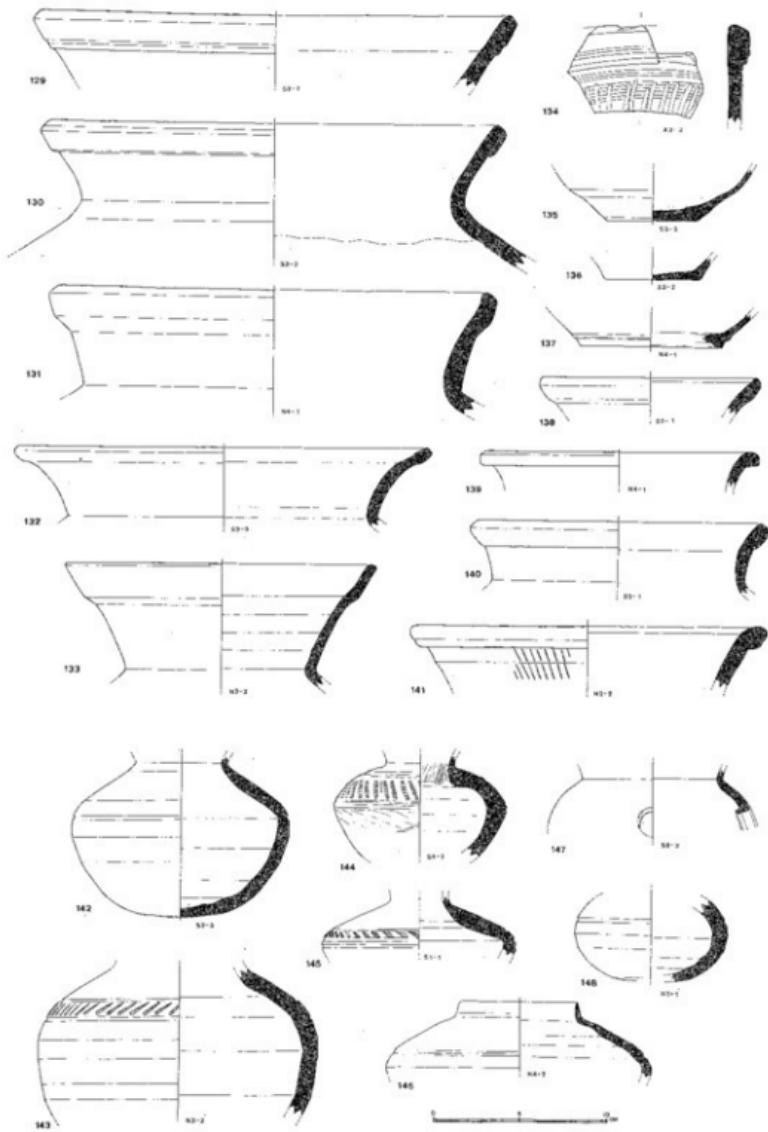
第16図 玉縁付丸瓦実測図と平瓦拓影



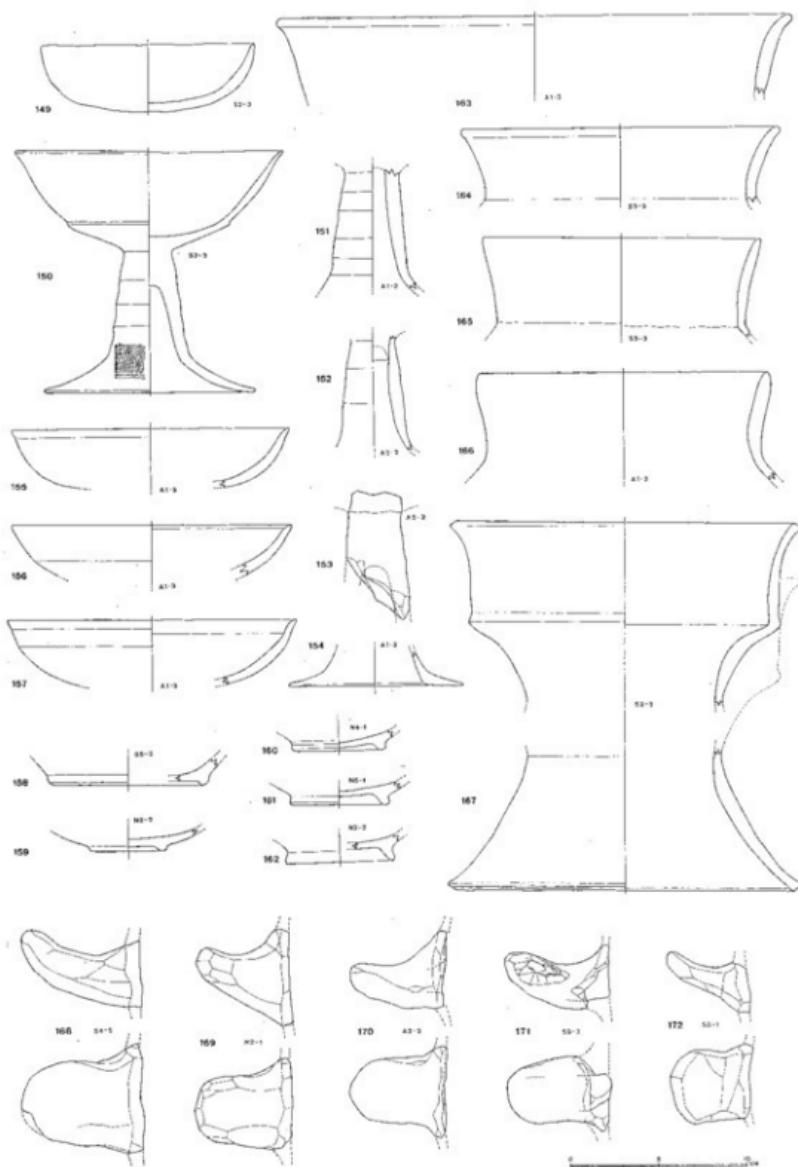
第17図 須恵器実測図



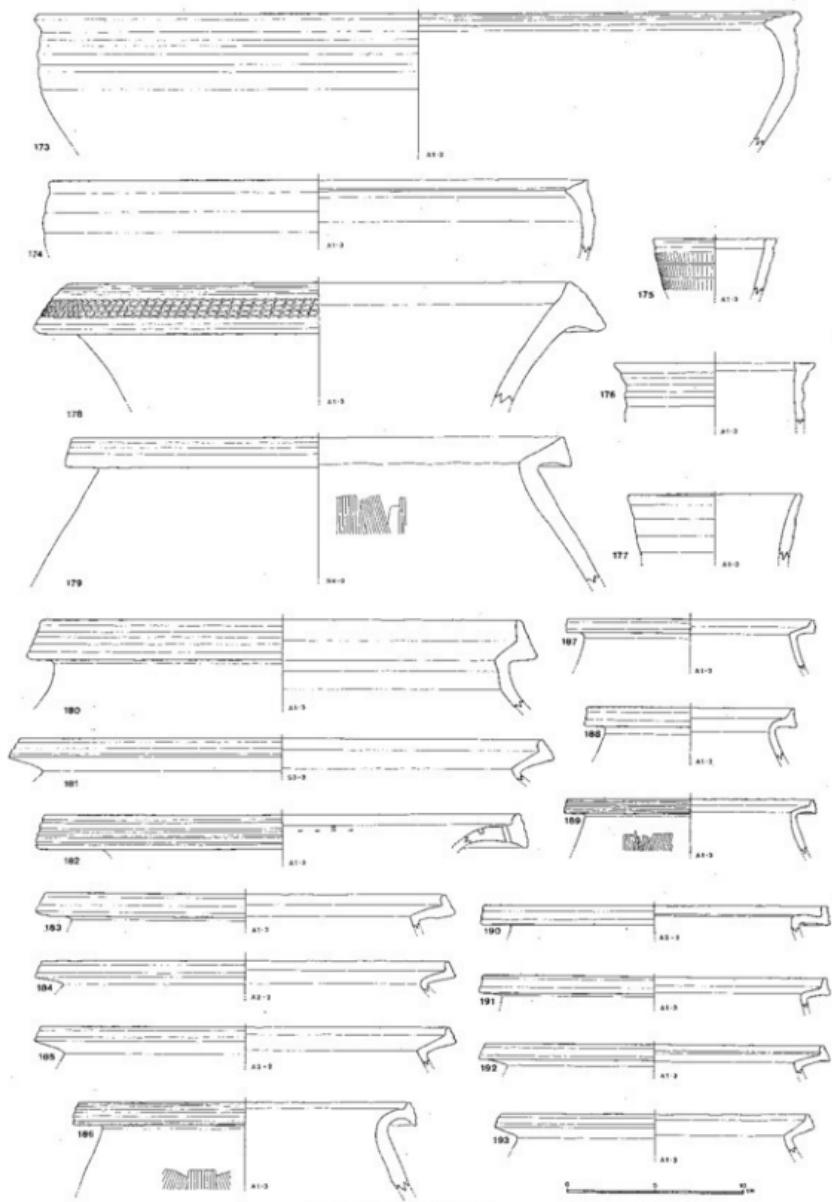
第18図 須恵器実測図



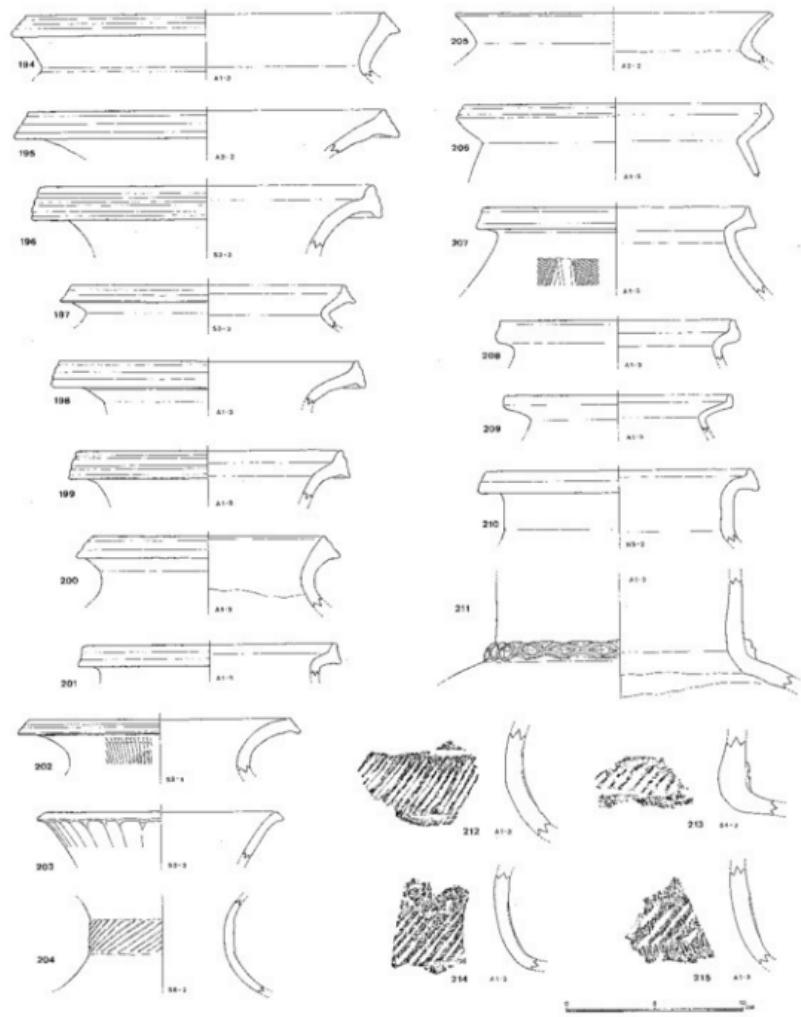
第19図 須恵器実測図



第20図 土器実測図



第21図 弥生土器実測図

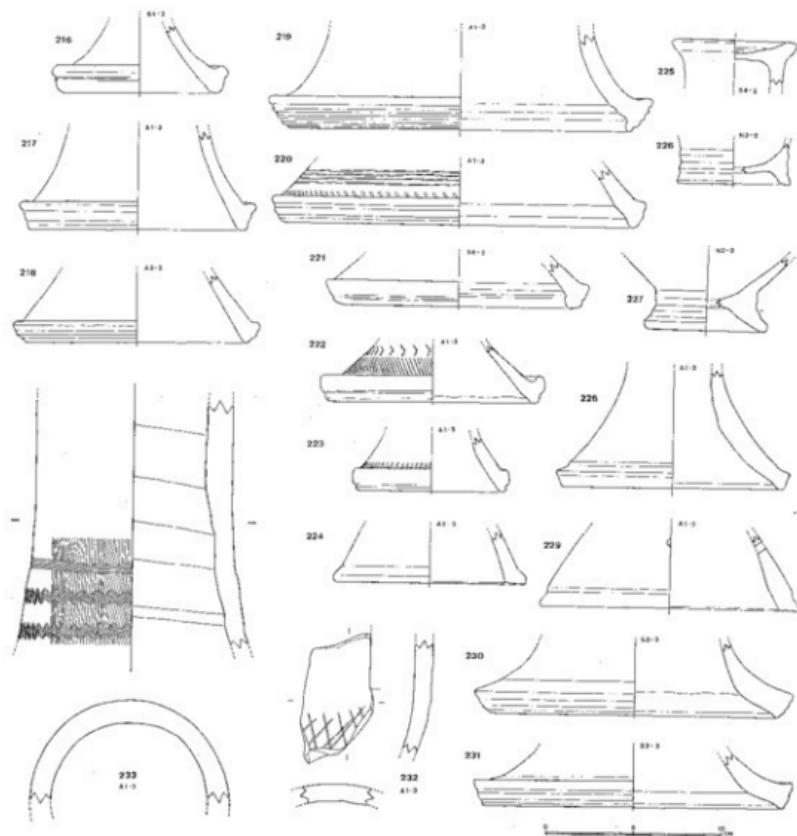


第22図 弥生土器実測図

※実測図には通し番号の他に、それぞれの遺物が出土したグリッド名と土層番号を示した。

(例、S 3-2 → S 3 グリッドの第二層から出土)

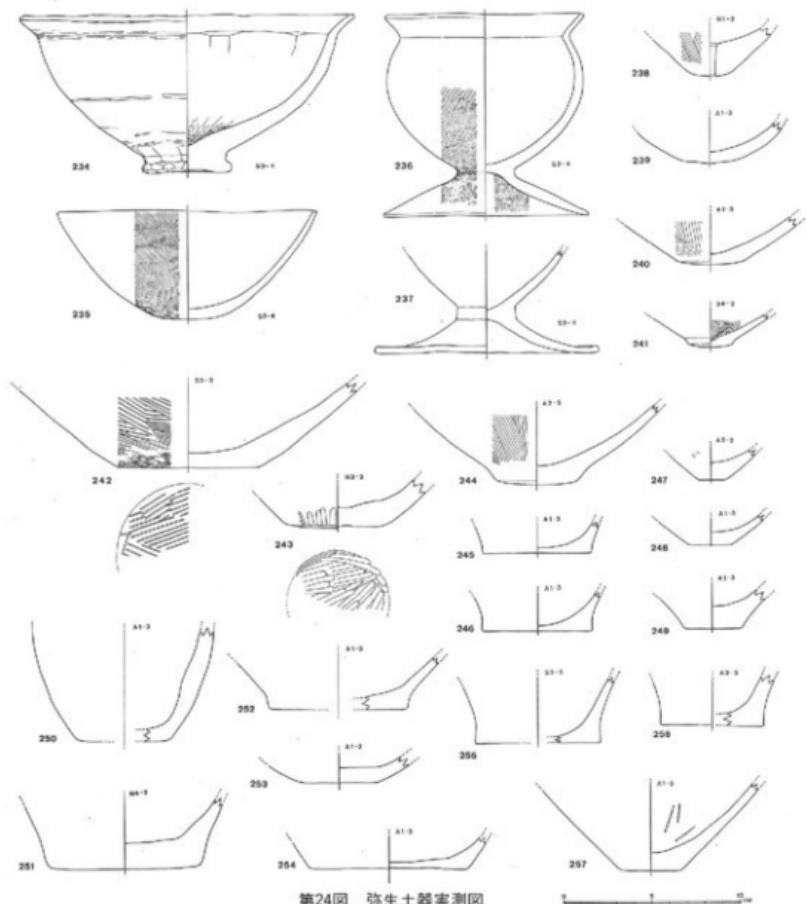
N2-3・N3-3・S2-3の遺物は一括して取り上げたので、A-3で統一した。また、住居跡を検出するために新しく設定したグリッドの遺物は、B-1・B-2・B-3とした。



第23図 弥生土器実測図

—特殊な遺物に解説を加える—

126、須恵器の杯蓋と思われるが、赤色顔料で記号が施されている。127・128、ヘラ記号のある須恵器片であるが、器形は不明である。149・150、土師器の杯と高杯であり、いずれもSD-06の砂利層直上にて、第三層中より完形で出土している。167も同様に第三層中から出土した土師器である。一個所から集中して出土した破片を接合した結果、このような図が得られた。器台であろうか。232、器台の破片である。長方形のスカシ窓とヘラ描きの斜格子文様に加えて、赤色顔料により彩色が施されている。233、器台であり、丁寧な縦のヘラなどの上に横目の波状文が認められる。234～237、この四点は第三遺構面に伴い一個所から集中して出土しており、237のみ上部を欠くが他は完形を保っている。

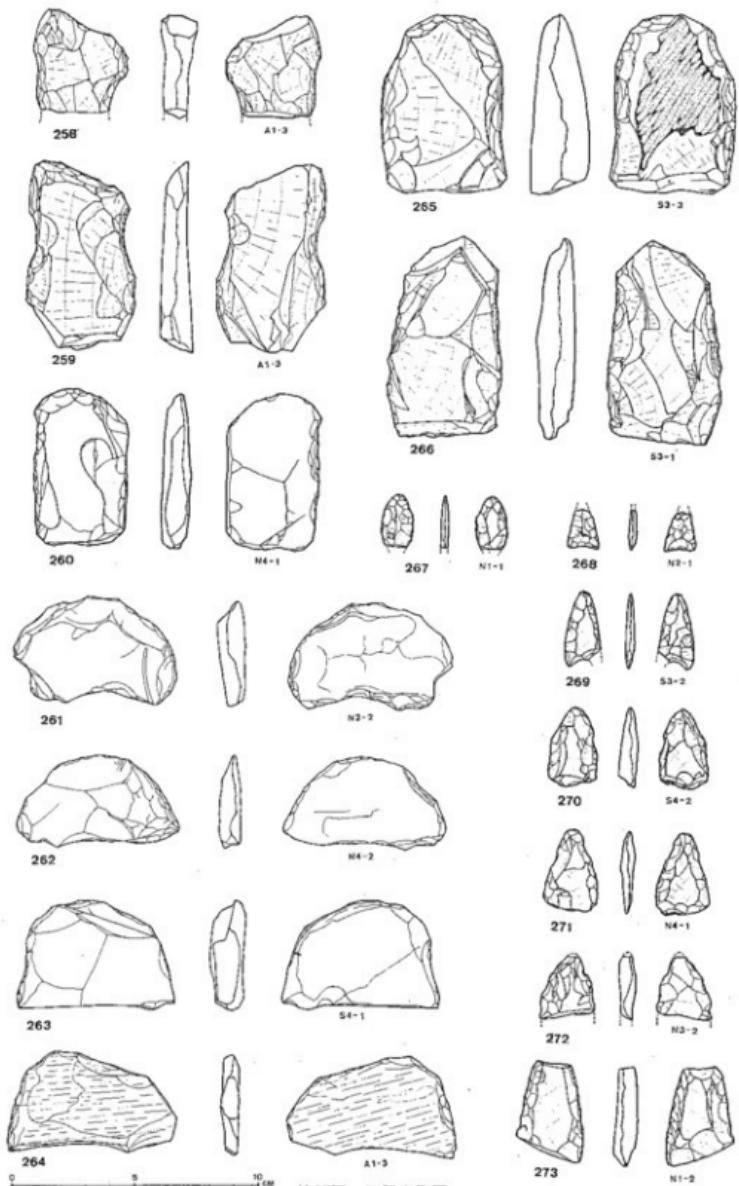


第24図 弥生土器実測図

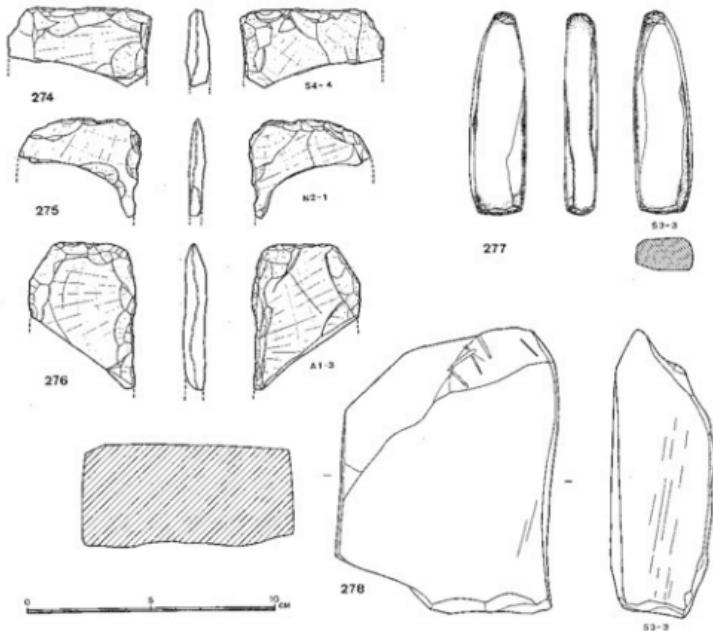
235の内面には赤色顔料が付着している。



左より234、235、236



第25図 石器実測図

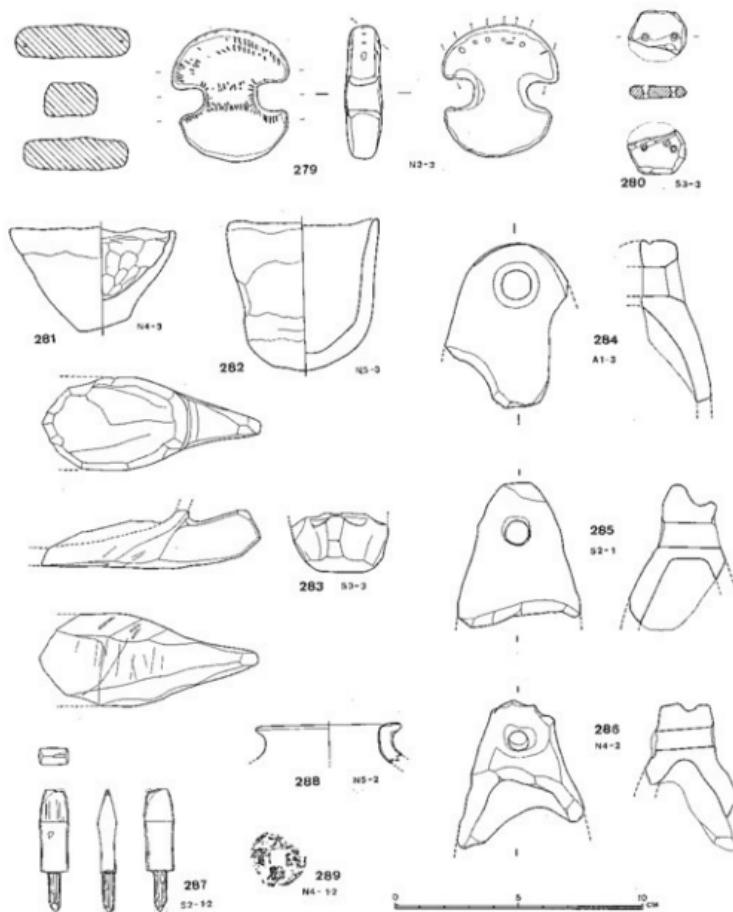


第26図 石器実測図

260～263は安山岩製で灰白色を呈しており、石器としては軟質な石材を使用している。264・277は非常に硬質の緑泥片岩製、278は非常に粒子の細かい軽石のような、乳白色の石材を使用している。その他は全てサヌカイト製品である。

261～264、いずれも厚さ約1cmで半円形の打製石器である。石包丁かと思われる。277、柱状片刃石斧を叩き石に転用したものであり、両端はつぶれているが、石斧として使用された際の使用痕が認められる。278、砥石。277・278はSD-06の砂利層直上の第三層中より出土したものである。

279、分銅形土製品。上縁部とくびれ部にそれぞれ二列、くりこみ部にそって一列の刺突文を施している。また上縁部から裏面にかけて六個、それをはさむ両端の上縁部からくりこみ部内側にかけて二個の貫孔が穿たれている。旧練兵場遺跡からの出土は、これが二点目である。280、茶色の滑石を用いた石製模造品、石製有孔円板である。古墳時代に盛行した鏡の石製模造品と考えられている。281・282、ミニチュア土器。281は現代の盃のような形で作りは荒く、282は底部は丸いが口縁部ではやや方形となっている。283、舟形土製品。胎土精良であり仕上げの丁寧な土製品である。この遺物は一部分だけではある



第27図 その他の遺物実測図

が、舳先の部分の造りから、古墳時代の構造舟を連想することのできる逸品である。284～286、たこ壺。287、銅鏡。盤のように平らな刃先を持つ青銅製の鏡であり、本体は非常に美しい白銅色を呈しており、極めて良質の材料が使用されたものと思われる。古墳時代の遺物である。288、青磁片。壺の口縁部であろう。289、大觀通宝。宋銭であり、初鑄は1107年とされている。

7. まとめ

現在丸亀平野では、三井・五条・石川・中ノ池などの弥生時代の遺跡が、広範囲にわたり散在することが知られている。これらの弥生文化苗芽の背景には、この肥沃な沖積平野を作り上げた土器川・金倉川などの氾濫河川の基盤があり、この水系はその後も、当地に豊かな古代文化をはぐくみ続けてきた。国立病院から農業試験場にかけて広がる旧練兵場遺跡もこの例外ではなく、やはり金倉川の恩恵を受けていたようである。今回の調査で確認された氾濫原は、旧金倉川が残したものと推定されるが、すぐ近くから弥生時代後期の(SD-06)堅穴住居跡が検出されたことから、当地は既に土砂の堆積により微高地となっていたと考えられ、氾濫の名残りを留める湧水地か小河川であった可能性が高い。旧練兵場遺跡は、金倉川が氾濫によって作り出した土地に、最初に定着した弥生文化の象徴であり、今回出土した遺物だけから判断しても、祭祀の色濃い濃厚な文化が想定でき、周辺の山麓で発見された多量の青銅器との関連が注目される。

古墳時代においても、水系は灌漑用水路のみならず、交通手段としても重要な役割を果たしていたようである。今回の舟形土製品やたこ壺の出土に加えて、当遺跡の南西に隣接する善通寺西遺跡からは、幅4~5mの人工の水路が発見され、多くの土師器の壺や櫂などが出土している。しいては弘田川の最上流に位置する宮ガ尾絵画古墳に描かれた、舟群の線刻画を結びつけると、自然河川を中心とした運河の存在と共に、これを活用し内陸部から瀬戸内海に至る彼等の行動範囲の広さと、その精力的な実力の程が思い知れる。その勢力は大麻山と我拌師山に狭まれた谷に築造された七基の前方後円墳と、その周辺に存在する無数の古墳群の量・質にも示されている。また、舟形土製品・石製模造品や、普通寺西遺跡からも出土しているミニチュア土器などから、やはり祭祀集団が想定できよう。やがて仏教文化の流入と共に歴史時代を迎え、巨大な経済力と労働力の象徴ともいべき古墳の築造は、寺院建立へとその姿を変えてゆく。

今回の仲村廃寺の発掘調査によって得られた成果は、問題点としてとらえられた幾つかの事実であろう。仲村廃寺は白鳳期から奈良時代前期にかけて建立された寺院とされており、これは出土した瓦とも一致している。寺院の規模は方一町半であるらしく、その北限には寺域を示す土塁もしくは濠が存在している。ただしこれは、伝導寺墓地内の遺構を伽藍の中心とした場合であり、この遺構の範囲によっては方一町から方二町までの寺域も考えられる。条里遺構にみられる地割との関係からとらえてみると、SD-05の方位は磁針方位上の東西を示しており、N30°Eの条里方位とは一致しない。また仲村廃寺の寺地は、古代遺跡の上に客土をし整地したものであり、基礎の中に含まれる遺物の分析結果からも条里施行以前の建立が考えられる。

普通寺前寺からも仲村廃寺の瓦と同范製作のものを含めて、やはり白鳳期から奈良時代前期の瓦が出土しているが、寺地は方二町として条里方位と一致している。普通寺前寺は佐伯家先祖によって、白鳳期に氏寺として建立されたとする説が有力であるが、この寺の中心から伝導寺墓地までは500mと離れておらず、同一時期において、このように隣接した位置に寺院が築かれるということは不自然である。また白鳳期に建立された寺院としては、条里と完全に重なるという点も疑問である。これらの問題点を、現在までに判明している事実と合わせて、その可能性を推測してみたい。

普通寺前寺の伽藍の中心から条里に沿って七里東進すると、白鳳期に建立された寺として知られる宝幢寺の塔心礎に当たる。宝幢寺の塔心礎は土壇の中央か主軸線上にあるとされている。この主軸はN20°Wに振れており条里方位を示しておらず、やはり条里施行以前の建立が考えられる。このように普通寺前寺の方位や寺域の決定には、他の古代寺院を含めて、何らかの地割に従う法則の存在が考えられる。普通寺前寺の設定は条里制の実施と同時か、それ以降の可能性が高いわけであるが、逆に条里制の実施を普通寺前寺の建立時期に考え合わせてみることも必要であろう。

ここで白鳳期に佐伯家先祖によって建立された氏寺を仲村廃寺として、条里施行に合わせて瓦などの寺院の構成要素と共に、移転し再建されたものが普通寺前寺であるということも考えられよう。両寺の位置関係や、条里施行以後に建立されたであろう普通寺前寺から出土する瓦が、白鳳期に建立された仲村廃寺の瓦と同范製作のものである点も理解できるであろう。

今回の調査で得られた事実と推測を裏付けるために、今後の寺域推定地及び周辺部の調査を期待するものである。また旧練兵場遺跡についても、今回の調査面積は遺跡推定全面積の数百分の一にしか過ぎず、その性格の一部に触れることはできたようであるが、全体を把握するには永い年月と地道な調査の積み重ねが必要となるであろう。

参考文献 「普通寺市史」

「古瓦百撰」讃岐の古瓦 安藤文良

「讃岐国古代寺院の研究」 藤井直正

「宝帖寺跡発掘調査報告」 丸亀市教育委員会

仲村廃寺発掘調査報告

(旧練兵場遺跡内)

昭和59年3月31日発行

編集・発行 善通寺市教育委員会

善通寺市文京町二丁目1番1号

印刷所 サカエ印刷